シリーズ連載　地方公務員 file

風を起こす <第27回>

人の魅力を、まちの魅力に

伊丹市都市活力部参事 兼
教育委員会事務局生涯学習部参事

綾野　昌幸さん

グローバリゼーションの波が押し寄せる中で、画一化されていく「まち」。かつてまちの顔だった中心市街地がもはや虫の息、というところもあるだろう。安さと便利さに流されていく人々を振り向かせるために、有効な手段とは？

大阪のベッドタウン兵庫県伊丹市。ＪＲ伊丹駅を境に東西で異なる表情をもつ。東側は工場跡地に巨大なショッピングモールがそびえ立つ一方、中心市街地である西側は酒蔵や町屋が軒を連ね、酒造業で栄えた歴史の面影を残す。江戸時代、文人墨客が集い豊かな文化が花開いたこの一帯が、現代では春と秋の年2回「バル」と化す。

スペインでは街の至るところで見かける「バル」は英語の「バー」と同じ語源だが、朝のコーヒーから気軽に立ち寄れる。カウンターで立ち飲みしながら、店自慢のおつまみを軽く頂くのが基本のスタイル。このスペインの食の日常をイベントにしたのが、函館西部地区発祥の「街バル」である。

数枚綴りのチケットを購入し、飲食店をはしごして楽しむ街バルでは、チケット1枚で1ドリンク＆1フードのバルメニューが提供される。だから、客側としてはいろんな店の料理を味わうことができ、逆に店側としてはいろんな客に来てもらうことができる。

客と店、双方にとっておいしい日本流の「街バル」を関西で最初に開催したのが伊丹市。いまや本家をしのぐほどになった「伊丹まちなかバル」の仕掛け人が、「まちづくりは止まったら負け」をモットーに中心市街地の活性化に日夜知恵をしぼってきた綾野昌幸さんである。

初めての街バルで「バルパニック」

「商店が元気じゃないと、まちなかに活気も出てきませんからね。集客効果の高い飲食店などを積極的に誘致していました。ですが、そこに大きなにぎわい、それも一過性のイベントではなく、店の固定客獲得につながる方法をなかなか見つけられずにいました」

［あやの まさゆき］
1961年、兵庫県生まれ。1983年、関西学院大学法学部卒業後、伊丹市役所入庁。市立病院、下水道局、市民税課、企画課、商工労働課等を経て現職。市の仕事以外では近畿バルサミット主宰、近畿中心市街地活性化ネットワーク研究会会長も務める。共著に『100円商店街・バル・まちゼミ: お店が儲かるまちづくり』（学芸出版社刊、2012年）、『都市商業とまちづくり』（税務経理協会、2005年）がある。

行列ができる店も続出した「伊丹まちなかバル」。普段は敷居が高い老舗にも気軽に入れるのも街バルの良さ。関西初開催の街バルはテレビや新聞でも取り上げられた

伊丹市文化振興財団とのコラボで同時開催した音楽イベント「オトラク」。まちなかはミュージシャンたちのライブ演奏で包まれた

解決の糸口となったのは一人の議員からのアドバイスだった――「函館でやっている街バルというイベント、伊丹でもやってみてはどうか」。情報収集するなかで、綾野さんは直感的に「イケる！」と確信した。

「誘致の効果もあって魅力ある飲食店がまちなかに集積していましたし、何より伊丹にはおもてなしの精神が息づいていました。つまり、街バルを成功させる下地はできている。しかも、店は普段の商売の延長線上でできるのです」

街バル開催に向けて動き出した綾野さんは、函館西部地区バル街実行委員会に電話とメールで教えを請うた。街バルの仕組みで綾野さんがとりわけ目を見張ったのが、「プール金」と「後バル」だった。

「〝プール金〟という発想には、〝イベント＝予算〟という固定概念が覆されました」

例えば、チケット1枚700円に対し店側には600円を支払う。この差額100円で客に配るマップやチケット、ポスターなどの印刷費をまかない、余った分はプール金として次回開催の経費となる。この仕組みで、イベントは助成金など無くとも持続可能となる。

もう一つの「後バル」は、余ったチケットをイベント終了後も金券として1週間使えるという仕組み。客とすればチケットをムダなく使い切れ、店としては客に知ってもらうチャンスが増える。

「街バルの仕組みを聞いて、これはすごい発想だなと。それに、ノウハウのすべてを丁寧に教えてくれた函館の事務局長の懐の深さにも感銘を受けました」

街バルに可能性を感じた綾野さんが商店街の経営者たちにプレゼンすると、「おもろいやん。やってみよう！」と賛同の声が挙がった。さらに綾野さんは、伊丹ならではの味付けをした。

「バルに合うのは音楽。生演奏の音楽で気分を盛り上げようという作戦です」

伊丹には「普段使いの音楽」をコンセプトに街のあちこちでミュージシャンたちが演奏する「伊丹オトラク」という音楽イベントがあった。これを街バルと同時開催すれば、相乗効果が生まれる。「町並み」「おもてなし精神」「音楽」……既存の地域資源を余すところなく生かし準備が進められた。

第1回の開催は平成21年10月17日（土）。昼過ぎから夕方まで雷雨に見舞われたにもかかわらず、客足は上々だった。普段は高齢の客が多い中心市街地が、マップを片手にはしごする若い客であふれかえった。

「54の参加店の中には、準備するバルメニューや食材を少なく見積もっていた店もありました。ところが、フタを開けてみると予想以上のお客さまで、出せる料理がなくなった。お客さまから苦情が寄せられ、〝バルパニック〟という造語まで飛び出しました」

「料理が出せんでお客さんに帰ってもらうなんて悔しい。リベンジしたる」――嬉しい悲鳴は経営者たちのやる気に火を付けた。新メニューの開発や独自のクーポン券など、経営者たちは競い合うように工夫を凝らすようになった。すると、さらに客が増える。この好循環で、伊丹まちなかバルは回を追うごとに規模を拡大。今やチケット販売数は初回の3倍以上、参加店も約100店にのぼる。

「伊丹まちなかバル」のガイドマップは、普段使いのガイドマップとしても活用できる

「宮前まつり」の復活で地域再生

市民病院を振り出しに下水道局、市民税課と異動してきた綾野さんが、配属先の企画課で当時まだ珍しかったコミュニティFMを発案し立ち上げたのは、平成7年に発生

見事に蘇った宮前まつりのふとん太鼓。毎年10月に開催され、若い担ぎ手も増加中！綾野さんも担ぎ手の一人として祭りに参加する（前列右から2人目）

した阪神・淡路大震災がきっかけだった。未曾有の大災害は伊丹市内にも甚大な被害をもたらした。地域情報の必要性を痛感した綾野さんは、すぐさまコミュニティFMの立ち上げに向けて動き、翌年末には「エフエムいたみ」を開局させた。

その後、異動先の商工労働課で、自ら「ターニングポイントだった」と振り返る仕事に携わる。それは、中心市街地の一角を成す宮ノ前で消滅していた「宮前まつり」の復活だった。

「私が小さい頃、宮ノ前はアーケードもあるにぎやかな商店街でした。それがいつしか寂れ、皆が心待ちにしていた宮前まつりも無くなってしまったのです」

「長く途絶えていた宮前まつりを、もう一度復活させたい」――地域の人々の願いは叶えられずにいた。特に震災後は被害が大きかった地区でもあり、それどころではなくなっていた。商工観光の視点から震災後のまちづくりに取り組んでいた綾野さんは、復興の象徴として宮前まつりの復活を掲げた。それは地域社会の再生でもあった。

「最大の難問は祭りの見どころとなる〝ふとん太鼓〟の担ぎ手の確保でした。それが想像以上に大変だったんです」

数トンもあるふとん太鼓を9時間近く担ぎ続けるには、腕っ節のある担ぎ手が百人以上必要となる。後継者不足や高齢化が進む商店街で、担ぎ手の確保は困難を極めた。そもそも祭り消滅の一因もそこにあった。

「まちの人々と幾度となく話し合った結果、〝開かれた祭り〟として広く担ぎ手を集めるという方法に辿り着きました」

地震で崩壊していた阪急伊丹駅ビルが再建を果たした平成10年10月10日、大勢の市民が見守る中、ふとん太鼓が勇壮な姿を現した。まちに担ぎ手の威勢よい掛け声が鳴り響いた。震災で傷ついたまちが、久しぶりに人々の笑顔で輝いた。

「まちの中に飛び込み、まちの人と膝を交えて話し、一緒になってゼロから一つのものをつくり上げていく。その醍醐味を知って、まちづくりの現場っていいなと思うようになりました」

以来、綾野さんはまちづくりの現場を走り続けてきた。ハード面では、民間と共同で歴史的な町並みを再生させた。ソフト面では、数え切れないほどのイベントや事業に関わってきた。民間発、市民発を支援することもあれば、自ら企画することも多い。

「伊丹の酒に合う最高のアテを競い合う〝ATE―1グランプリ〟も盛り上がりますよ」

遊び心あふれるイベントや事業の数々。綾野さんの話を聞いているだけで、何だかワクワクしてくる。

「自分自身が面白いと思うものじゃないと、市民の方に面白いと思ってもらえませんし」

よそのまちで成功した事例も、いいと思えばどんどんやってみる。と言っても単なるモノマネでは終わらない。「伊丹」という器に入れることで、新たな個性が生まれる。まちづくりにおける綾野さんのスタンスは「こけてもいい。でも、絶対に止まらない」。

真の市民協働

伊丹まちなかバル開催後、参加店にアンケートをとると、3割以上が「新規顧客が増えた」と回答した。老舗に若い客が、立ち飲み屋に女性客が目立つようになった。効果はそれだけにとどまらない。

「商店街ごとで実施していた会議を、街バルではその枠を超えて開催するようにしました。すると、新たなネットワークが生まれたのです」

重鎮が幅をきかせがちな従来の枠組みで、くすぶっていた若手経営者たち。その中から、自然発生的に次々と新しいイベントが生まれた。イベントに欠かせないボランティアも希望者が大幅に増加した。

「私は行政の人間ですから、ずっと同じ仕事ができる保障はありません。ですが、市

民の方が参加してくだされば、息が長い活動ができます。だからこそ、私は市民の方に面白いと思ってもらえることを仕掛けていきたい」

以前なら市民参加、市民協働を声高に叫んでも実態としては毎回同じような顔ぶれということも少なくなかったが、今では言葉と実態に齟齬がない。

「伊丹はもともと心意気のある〝まち衆〟が多い地域なんです。いろんな立場の人が集まって、気兼ねなく話せるフラットな土壌もある。だから、実行委員会でも役割分担がバシッと決まります」

「人づくり」こそ「まちづくり」。まち衆の心を動かしたことで、まちという舞台が光を取り戻した。綾野さんが経験からつかんだ協働のコツには「情報共有」や「感覚のすり合わせ」などあるが、そこに求められるのはコミュニケーションであり、道具として欠かせないのが「言葉」である。

「なすがままに」の裏で流した汗

中心市街地活性化の一つと位置づけられ、平成24年にオープンした伊丹市立図書館「ことば蔵」。綾野さんは併任する教育委員会事務局生涯学習部参事として、その立ち上げから関わっている。

ことば蔵は伊丹の文化を発信する拠点として、本にかける帯のオリジナル作品を募集し表彰する「帯ワングランプリ」など、数々の企画を打ち出してきた。個人が自分のおススメ本を介して人と出会う「恋のカエボン」など、綾野さんの部下である2人の若手職員もユニークな企画を出してくる。

「いい企画を出されたら〝やられた〜〟と思いますし、〝自分も負けんようにアイデアを出していこう！〟という気になります」

管理職でありながら、プレイヤーとしてライバル心も燃やす。ではあるが「彼らのやりたいことは、できるだけ実現させてあげたい」と親心も見せる。仕事をする上で心掛けているのは「現場主義」。

「どんな仕事でも、まずは現場に足を運ぶことです。『踊る大捜査線』の〝事件は会議室で起きているんじゃない。現場で起きているんだ〟じゃありませんが、現場へ足を運び、市民の方と話をしなければ、何も見えてきません。だから、部下もよく現場に連れて行きますよ」

伊丹まちなかバルの成功は近隣のまちに飛び火し、関西では街バルの輪が広がっている。綾野さんはノウハウを請われれば、函館の事務局長がそうしてくれたように惜しみなくすべてを伝授する。自ら近畿バルサミットを主宰するほか、近畿中心市街地活性化ネットワーク研究会の会長もこなす。公私ともに多忙な日々を乗り切る秘訣は、その座右の銘にあるのか――「Let it be」。

「なすがままに、肩にあまり力を入れず、ユル〜く生きてますから」

就活の際、公務員という硬い職業は自分には不向きではないかと思った。同じく伊丹市職員だった母と大学の恩師からのアドバイスで市役所を選んだ。

「市民から要望や苦情をダイレクトに受ける大変さはありますが、市民と一緒になって考えることができ、一番力になり得る存在。結果的には市職員になってよかったと思います」

綾野さんの「ユルさ」の裏には、常にスピード感をもって、時にはダイナミックに取り組んできた汗が流れている。

まちづくりの仕事は土日もつぶれがちで「家族には寂しい思いをさせています」。その分、休みが取れたら一緒に旅行する。今年の旅先はスペイン。本場のバルを体験し感慨ひとしおだったが、最も印象に残ったのは「カフェで一人の紳士が席を譲ってくれたこと」と「バルの店員に笑顔で話しかけられたこと」だった。

「こっちはスペイン語もわからんのに、気さくに話しかけてくれるんです。知らない者同士でも自然に言葉を交わす、それは伊丹の街バルも同じです。相席になって見知らぬ同士に会話が生まれる。そこが面白いんですよ。関西で街バルがヒットしたのはスペイン人に近い気質があるからじゃないかと言い続けてきたんですけど、説得力がなかった。でも、これからは自信をもって言えます」

人の魅力こそ、まちの魅力。それがまたまちの個性をつくるのかもしれない。

（取材／ライター　更田沙良）